

高齢者の冬期交通特性

秋田大学 正 員 清水浩志郎 木村 一裕
学生員 古山 広功 ○佐々木浩文

1. はじめに

今日、わが国では急速に高齢化が進み、高齢者が抱える交通問題に対する意識が急速に高まってきている。それと同時に高齢化社会に対応した種々の対策が検討され、徐々に実施されている。しかし、現在の対策では積雪地域など冬期の交通条件が夏期とは変化する地域においては十分であるとは言えない。

そこで本研究では、冬期における高齢者の外出状況及び交通手段の選択性、転換特性を明らかにし、今後の冬期交通計画の基礎資料となることを目的とする。

2. 調査と分析の方法

冬期における高齢者の交通挙動を把握するためにアンケート調査を実施した。調査は昭和62年9月から10月にかけて、秋田市に在住する50歳以上の中・高齢者を対象として留置法を用いて行なった。

高齢者の交通挙動は外出目的や交通手段などにより、さまざまなパターンに分けられると考えられる。そこで本研究では、高齢者の外出目的を主要な目的である、買物、団体活動、通院に注目し冬期の外出状況ならびに交通挙動を分析する。

3. 高齢者の身体特性と分析結果

(1) 高齢者の身体特性

総務庁が昭和61年度に実施した「高齢者の交通安全に関する意識調査」により高齢者の身体状態(図-1)についてみると、健康状態については10%前後の者が「病気がち」と答えている。他方、視力等については70代以降低下する者が多く、「信号等が見えにくい」と答えるものが60代前半の5.3%から80歳以上になると24.7%、歩行については、「つらい」とする者が同じく23.1%から46.3%へと、それぞれ加齢に伴って増加し、高齢者自身、自分の身体が弱まっていることを自覚していることがわかる¹⁾。

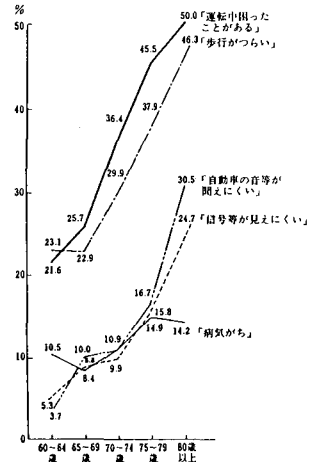


図-1 高齢者の身体特性¹⁾

(2) 高齢者の交通特性

上述した高齢者の身体特性を考慮するとその外出特性は、身体的なハンディキャップや交通環境に大きく影響するものと考えられる。特に積雪によって夏期から冬期の交通条件が変化し危険が伴う地域においてはその障害はさらに大きくなると考えられる。表-1は、交通条件の変化に伴って高齢者が冬期にとる外出行動について示している。これによると、交通手段の転換や外出回数を減らすという夏期とは異なった外出行動をとる割合は、買物が52%、団体活動23%、通院では32%である。また、交通手段を転換する割合は、通院、団体活動で23%、買物では14%となっている。さらに、外出回数の減少と外出の断念についてみると、買物38%、団体活動11%、通院では8%となっている。このことから、冬期の交通条件の悪化に対して団体活動や通院目的では、交通手段を転換して外出している者が多く、買物目的では、外出回数を減らしていることがわかる。

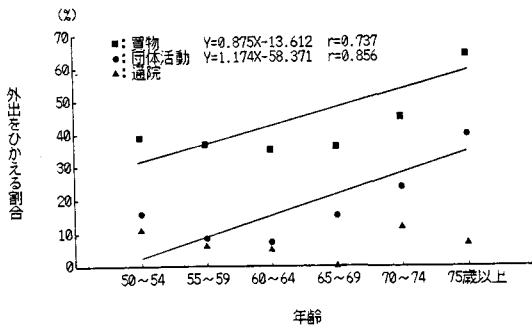
表－1 高齢者の冬期外出状況

	夏期 同様	交通手段 を代える	外出を 減らす	外出を やめる	合計
買物	48.2	14.0	27.4	10.4	100
団体活動	66.7	22.4	6.7	4.2	100
通院	68.1	24.3	2.8	4.8	100

単位：％

(3)年齢別にみた高齢者の外出特性

冬期の交通条件の変化によって起こる外出回数を減らすという現象に注目し、年齢別に分析してみると、図－2より、加齢に伴い外出を控える割合が増加している。特に買物と団体活動では、年齢との相関係数は0.737、0.856と年齢との関連性はかなり高い。また、年齢による有意差の検定を行った結果、有意水準5％で60代と70代以上で有意差があり、60代と50代とでは有意差は認められなかった。通院では、60代と70代以上では有意差はなく、60代と50代とでは有意差があった。しかし、通院は比較的強制的な目的であるため、年齢との関連性がなく、年齢差に外出状況の差はみられなかった。このように高齢者の冬期の外出特性は、買物と団体活動では70代で大きく変化しており、通院では60代で変化していることがわかる。また、高齢者の身体状態が65歳を越えると著しく衰えること(図－1)から、買物と団体活動で60代を越えると大きく外出を控える割合が増加する理由と関連性があると考えられる。

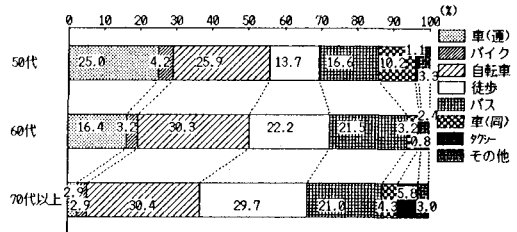


図－2 年齢別外出を控える割合

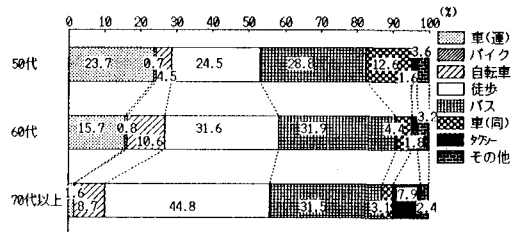
(4)利用交通手段

冬夏期別にみた交通手段の利用状況(図－3、4)は、50代では、冬夏期とも「自動車(自分で運転)」が20％以上と比較的利用が多いが、60代を過ぎると夏期は「自転車」と「徒歩」、冬期は「徒歩」と「バス」の利用が多くなっている。また、夏期に利用

が多かった「自転車」が冬期になると利用が困難になるため、「徒歩」や「バス」等の公共交通機関に依存する割合が高くなる。このように、車の運転や、バイク、自転車など高齢者の身体特性に依存する交通手段の利用が、70代以上において大きな制約を受けている。また、これらのハンディキャップを負った高齢者は、冬期には徒歩あるいはバスへ転換を行うか、外出回数を減らしているものと考えられる。



図－3 夏期における利用交通手段



図－4 冬期における利用交通手段

4. むすび

冬期の交通条件の悪化に対して高齢者の外出状況は、目的によって多少の差はあるが、加齢に伴い減少する傾向がみられることがわかった。また、身体的なハンディキャップにより利用する交通手段が限定されることが、冬期的外出回数を減少させる原因とも考えられる。

以上の認識から高齢者の冬期の交通の確保のためには、デマンドバス等の公共交通のサービスの充実が今後の課題であるといえよう。なお、調査にご協力いただいた秋田県地域婦人団体連絡協議会及び秋田市連合婦人会には、深く謝意を表します。

【参考文献】 1)交通安全白書(昭和62年版) 2)清水浩志郎、他1名：高齢者の交通に関する調査分析、都市計画学会学術論文集(1983) 3)秋田県：雪国秋田の現状と雪対策(昭和60年)